

## 友だちに教えてもらったこと

郡上市立郡上東中学校 3年 加藤 愛理

「友だち」とは何だろう。あの時の私は、友だちとはなんなのか全く考えていなかった。

私は、中学生になり、テニス部に入部した。市大会や地区大会、県大会とたくさん試合がある。その中で、違う中学校の子同士が話しているのをよく見かける。「私も他中の子と仲よくなりたい」と思った。

私が最初に声をかけたのは、試合で毎回優勝している子だった。同じ中学校の子と二人でその子に会いにいった。

「友だちになってください」

私は勇気を出して、その子に声をかけた。その子は「はい」と返してくれた。私は、試合で毎回優勝している子と友だちになれてすごくうれしいと、その時は思った。

しかし、その子とはそれ以来、すれ違っても笑い合ったり、話したりすることはなかった。なぜだろう。その時の私は、何を基準に友だちを選んだのだろう。そう考えた。きっと私は、その子はテニスが上手だから強いから、ただそれだけの理由で友だちになりたいと思ったんだと思う。積極的に友だちを作ろうとすることは良いことだと思う。でも、この関係は友だちではない。自分の中で、私にはテニスの上手な友だちがいるという満足感だけだったのだ。

3年生の春、私は大会に出た。3年生にとって最後のシングルの試合だった。私は1回戦目から、ファイナルまで続く長い試合になった。相手も一步もゆずらなかつた。ここまでやってきたのだから絶対に勝ちたいと、相手に強いライバル意識をもった。結果は少しの差で私が勝った。私はライバルに勝ててすごくうれしかった。試合が終わったので戻ろうとした時だった。さっき戦った相手に声をかけられた。

「次の試合頑張ってください。最後の試合だから」

彼女はこう言った。私は彼女に感動した。負けて悔しいはずなのに、なぜ勝った私に声をかけてくれたのだろう。私だったら、悔しくて相手を思うことなんてできないのに。彼女はその後、手をさしのべてくれた。私と彼女は固く握手をした。彼女の手から、悔しいけど頑張れと、私のことを思ってくれている気持ちが伝わってきた。私は、そんな彼女の心の広さを感じた。同時に彼女の気持ちを大切にしようと思った。次の大会では彼女に会えなかった。しかし、その時の彼女のあたたかさをしっかり覚えている。私の中でライバルとして意識していた彼女が、急に大切な人に思えた。

声をかけてくれた彼女は、私と友だちになろうと思って声をかけてくれたのかどうかはわからない。でも、私が声をかけた時とは気持ちに違いがあった。私が声をかけた子には、自分よりも断然テニスが上手で強いというイメージがあり“憧れ”だけで終わってしまっていたのだ。だから、声をかけるにも、かけにくかった。

声をかけてくれた彼女に対しての私はどうだろう。初めはライバル意識だった。でも、この関係を変えてくれたのは、悔しい中でも広い心を持ち、相手のことを思うことのできた彼女の言葉や行動だ。私も彼女のように相手のことを思える人になりたい。私たち二人のように、たとえ戦った相手でも、ライバルから「大切な人」に変えることができる。

誰にでも嫌いな人、苦手だと思える人がいると思う。その人にも、きっと良い所があるはずだと探してみたら、その人が少しずつでも良い人に見えて、その人に対する意識が変わると思う。また、相手との関係を自分より上とか劣っているとか考えることは良くない。自分で差をつけて、相手との壁を作ってしまうと思う。実際に友だちと思っている同じクラスのみんなとは、上下関係はない。

“憧れ”だけで終わってしまった子には、力の差ではなく、心から向き合うことが大切だと分かった。今の私なら、“憧れ”だけで終わってしまった子にもう一度、声をかけることができるだろう。自分に対しての満足ではなく、私に声をかけてくれた彼女のような相手に対しての思いやりで。嘘の友だちから、誠実な友だちへ。「友だちになってください」ではなく「友だちになろう」と。

あの時、ライバル意識をもっていた私に、声をかけてくれてありがとう。教えてくれた思いやりを忘れず、私も誰かに声をかけたいと思う。